第５章
おおいた豊後大野ジオパーク

おおいた豊後大野ジオパーク
Oita Bungoono Geopark

おおいた豊後大野ジオパークロゴマーク

1. 背景と着想：「豊後大野の資源をどう捉え、地域発信につなげるか」

平成 17（2005）年３月 31 日、旧大野郡５町２村の合併により豊後大野市が誕生しました。新市の一体感醸成と独自の地域ブランド構築が求められる中、本市が誇る豊かな自然・歴史・文化資産の再評価および次世代への継承が重要な政策課題となりました。

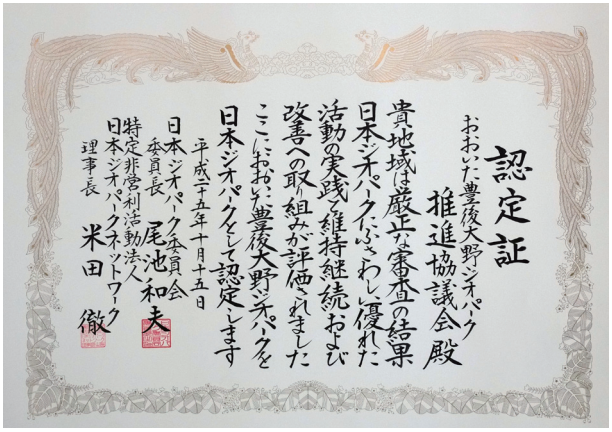
そこで着目したのが、地域を根底で支える「大地（地質・地形）」です。本市には、約９万年前の阿蘇火山による巨大火砕流がもたらした広大な溶結凝灰岩の大地や、原尻の滝、沈堕の滝をはじめとする稀有な自然造形が点在しています。

これらの地形基盤（ジオ）の上で人々が農業を営み、歴史的文化・風土（エコ・カルチャー）を育んできた構造を「地域独自の資源」として一体的に捉え直し、地学教育や地域振興、観光政策を結びつけた「ジオパーク」による持続可能なまちづくりへの取り組みが始動しました。

2. 認定までの歩みと成果：日本ジオパーク加盟と持続的な推進体制

学術的価値の体系化と地質調査を進める傍ら、市民への啓発活動やジオパークガイドの育成、地域資源の掘り起こしを展開しました。

その結果、平成 25（2013）年９月、日本ジオパーク委員会より「おおいた豊後大野ジオパーク」として認定を受けました。



認定証

認定を契機に、ジオパークガイドによる質の高いツアー展開、小・中学校でのふるさと学習（保全・防災・地学教育）の導入、専門家との連携による調査研究など、事業を本格化しました。４年ごとの再認定審査を経ながら、市民が「自らの地域価値」を深く理解し、保全・発信する体制を確立してきました。

現在では「ジオ・ジュニアユースクラブ」を通じた次世代育成にも注力し、地域の魅力を主体的に語れる未来の人材を育んでいるほか、これまで異なる分野で活動していた地域の人々や団体が「ジオ」という共通概念のもとにゆるやかにつながり、連携の輪が広がったことが成果として挙げられます。

3. みどころの再定義：大地の物語を紐解く「地球と人々のストーリー」の体感へ

おおいた豊後大野ジオパークの真価は、個々の景勝地を巡る点的な観光に留まらず、広域的な「大地の成り立ち」と「人々の暮らし」を結びつけて捉える点にあります。

例えば「東洋のナイアガラ」と称される緒方町の原尻の滝は、約９万年前の阿蘇火山の４回目の巨大噴

火による火砕流が冷え固まって生じた柱状節理と川の水流による浸食運動が組み合わさって誕生した、自然の造形美です。



原尻の滝

また、三重町の菅尾磨崖仏は、溶結凝灰岩の巨大な岩壁に刻まれた、平安時代後期に作られた精緻な作りの５体の磨崖仏です。加工しやすい性質を持った大地の恵みと、人々の深い信仰心が融合した歴史的遺産で、国の重要文化財に指定されています。



菅尾磨崖仏

そのほか、清川町の出会橋・轟橋は、溶結凝灰岩を巧みに加工して造られたアーチ型の石橋群で、近接して架かる両橋は日本一と第二位の径間を誇り、近代の物流や暮らしを支えた石工技術の高さと、地域特有の石材利活用文化を力強く物語っています。



下流側から見た出会橋（手前）と轟橋（奥）

ジオパークガイドの案内や解説板の整備を通じて「なぜこの場所にこの景観が存在するのか」というストーリーを可視化することで、見慣れた日常風景に新たな付加価値を創出しています。

４．これからの展望：ジオパークを通じた持続可能な地域社会の実現

大地を知るプロセスは、本市の歴史や産業、暮らしのルーツを再発見する取り組みそのものです。恵まれた地質構造と水資源があったからこそ、全国有数の農業地帯としての発展や石造文化（磨崖仏や石橋等）の醸成が実現しました。

市制施行から20年の節目を迎え、豊後大野市ば「足元の大地」の価値を再認識・再定義しています。

今後は、環境保全と地域経済（観光・農林業）の好循環を確実なものとし、市民の愛郷心の醸成とともに、ジオパークを活用した関係人口の創出・拡大、持続可能な未来に向けた地域創生を推進していきます。